

5 SGH クラブの活動

(1) 研究班

A マレーシアフィールドワーク

(1) 実施団体

栃木県立佐野高等学校SGHクラブ（研究班）海外チーム

(2) 実施時期

令和元(2019)年6月～12月 クラブ活動

(そのうち水俣フィールドワークを令和元(2019)年7月20日～25日にかけて実施)

(3) 実施目的

本校のSGH教育事業の一環として、マレーシアでの自然保護の取組み、語学教育の方法、民族文化の日本との違いについて、現地でのインタビューや大学での交流を通して調査する。

(4) 主な実施場所（連携した外部機関）

マタン野生動物センター、サラワク文化村、アナライズ村、セントテレサ高校、サラワク大学

(5) 取り組みへの参加者及び人数

栃木県立佐野高等学校SGHクラブ・研究班（14名）

秋山 華乃（2年） 関谷 愛可（2年） 安部 悠菜（2年）
大塚 萌絵（2年） 橋本 梨花（2年） 千葉 莉香子（2年）
秋野 恵理（2年） 荻原 彩加（2年） 後藤 李秋浜（1年）
原 悠馬（1年） 相田 紘夏（1年） 内田 小温（1年）
大嶋 美聖乃（1年） 山本 悠貴（1年）

(6) 依頼した外部講師等（敬称略）

- ・大久保 達弘（宇都宮大学農学部教授）
- ・赤堀 雅人（佐野高校非常勤講師）
- ・鍋嶋 誠一郎（INSAR Tours & Travel Sdn. Bhd）
- ・セントテレサ高校の先生方
- ・サラワク大学の先生方

(7) 日程

月日	調査地等	交通機関	主な内容
7/20（土）	（移動）	飛行機	
7/21（日）	マタン野生動物センター サラワク文化村	公用車	見学・調査
7/22（月）	アナライズ村	公用車	見学・調査
7/23（火）	セントテレサ高校	公用車	見学・調査

	サラワク大学		
7/24 (水)	クチン大規模市場 サラワク博物館	公用車	見学・調査

① マタン野生動物センター

サラワク州森林公社の同センターにおける森林の保全活動や施設の説明を聞いた後、オランウータンの世話や餌付けを体験した。ここは野生動物の引き取りや負傷したオランウータンを保護して治療や餌付けを行い、自然に戻すという活動をしている。生徒たちは係員の皆さんから英語での説明を聞き、英語で積極的に質問し、大変勉強になった説明会となった。



② サラワク文化村

「サラワク文化村」では、先住民族の住居や施設を見学し、住居や集会場での伝統音楽の演奏や工芸品作りなどを見学し、最後にホールで行われた伝統舞踊を鑑賞した。



③ アナライズ村

現存する多くの民族の内の一つであるビダユ族のアナライズ村でフィールドワークを行なった。村の見学後、「森林・農業チーム」「森林・観光チーム」「民族・文化チーム」「言語・教育チーム」の4班に分かれて、それぞれのチームが村人に自分から英語で話しかけて、情報を集めるという活動を約2時間行った。生徒たちは最初こそ戸惑っていたものの、すぐに適応して積極的に話しかけ始めていた。村を訪れていた、世界各国からの観光客（イギリス・フランス・チェコ・ウクライナ等）から情報を集めているチームもあった。その後、昼食前に集めた情報を共有するべく各班で発表会を行った。



④ セントテレサ高校

セントテレサ中等教育学校を訪問した。まず、校長先生から歓迎の言葉をいただき、続いて先生方の紹介、生徒会による学校紹介があった。その後、本校の2学年の生徒たちによる佐野高校の紹介を英語で行った。続いてセントテレサ校の生徒会の皆さんに校内を案内していただき、2班に分かれて授業を受けた。



⑤ UNIMAS(マレーシア国立サラワク大学)

マレーシア国立サラワク大学 (UNIMAS) を訪問した。言語学部と資源学部で各学部長の学部説明を聞き、生徒たちも教授との質疑応答を英語で行った。それぞれの学部で、名物のスイーツをいただきながら、交流会を行い親睦を深めた。



⑥ クチン大規模市場・サラワク博物館

午前中はクチン市内の大規模市場を見学した。ここでは、クチンで栽培している野菜・果物や、近海で採ることのできる海産物を流通してた。特に、何種類ものバナナや、香辛料(胡椒・唐辛子等)がたくさん売られていた。

その後、「サラワク博物館」を訪れ、サラワク州の歴史について学んだ。



(8) フィールドワーク後の主な活動一覧

R1年度 SGH海外班発表一覧

発表日	大会名	場所	備考
2019.11.20	令和元年度「とちぎの高校生課題研究等発表会」	とちぎ福祉プラザ	
2019.12.13	第4回SGH成果発表会	本校	
2019.12.22	2019年度「全国高校生フォーラム」	東京国際フォーラム	
2020.2.1	令和元年度「栃木高校SSH成果発表会」	栃木県立栃木高校	
2020.3.27	2020年「春季学術大会」(日本地理学会)	駒沢大学	中止

(9) 生徒の感想等

○多民族が共生するには互いに尊敬し合い文化を理解することが大切だと知った。日本の課題が明確になった。

<2-1 秋山 華乃>

○文献調査だけでは得られない予想以上に多くのことを得ることができた。更に研究を深めていきたい。

<2-1 関谷 愛可>

○現地の高校生と話す機会があり、英語力不足を感じた。コミュニケーションには積極性が大切だと思った。

<2-2 安部 悠菜>

○現代社会に残る様々な問題も、国や言語や生活様式が異なれば捉え方も変わると感じた。

<2-2 大塚 萌絵>

○マレーシアでの英語教育や母国語保護の取り組みから、日本が学ぶべき点が明確に存在していると感じた。

<2-2 橋本 梨花>

○高校・大学の訪問から、英語の重要性を伝える教育が日本には足りないと感じた。今後の研究に活かしたい。

<2-3 千葉 莉香子>

○いくつかの宗教が共存し日本とは異なる文化を感じた。何とかコミュニケーションがとれて嬉しかった。

<2-4 秋野 恵理>

○調査の中で、農業形態や社会における農業の役割・位置も、日本とは違いがあると感じた。また、マレーシアが抱える問題も他人事ではないと感じた。

<2-4 荻原 彩加>

○クチンは日本との比較研究に適した街だと感じた。世界に対する見方が変化した。FWで得られたことを今後の研究に生かし、内容の濃い研究にしたい。

<1-1 後藤 秋浜>

○多民族が互いの文化を尊重しながら生活していてとても興味深かった。オランウータン保護施設見学では人間と自然との共存は難しいと改めて感じた。

<1-1 原 悠馬>

○「百聞は一見にしかず」のFWだった。インターネットでは得られない多くの情報が得られた。FWを最大限に生し、明確な目標を立てて研究を進めたい。

<1-3 相田 紘夏>

○自分の目で見て現地の人々の声を聞いたことで、多くのことを吸収できた。特にアナライズ村とサラワク大学では農業について深く学ぶことができた。

<1-3 内田 小温>

○森林問題について理解を深めることができた。また、村や市場、高校・大学訪問などは貴重な体験となった。

<1-4 大嶋 美聖乃>

○異民族同士仲が良いことに驚いた。現地の学校の話の中で「リスペクトしている」等、想像とは正反対の答えを得られて、FWの重要性が理解できた。

<1-4 山本 悠貴>

(10) 成果と課題

本研修における生徒の反応は、一様に「現地での調査で初めて知ったことが多い」というものであった。実際にサラワクに関する講義を宇都宮大学の久保達弘教授からご講義いただいていたが、やはり現地の方々にインタビューをしたり、講義をいただいた結果新たに判明することが多かったようである。フィールドワークによって得た情報を元に研究を進め、日本が見習うべき点や逆に日本から世界に発信したい点を見いだすことができた。

一方で、今回SGH事業で初めてのマレーシアフィールドワークとなったが、1回のフィールドワークではとても情報が足りないことが分かったようである。村の文化も村によって異なるため、次年度3学年になる現2学年の生徒を除く全ての1学年の生徒が、継続した研究を希望している。次年度新たに新2学年が中心となって新1年生を指導していき、研究の継続をするとともに自ら課題を集めて発信する工夫をすることに期待する。